

一般的信頼の形成において、多様性は必要なのか？

—大学生のサークル・クラブを対象とした実証的研究—

鈴木 伸 生

本稿の目的は、大学サークル・クラブを対象に、相互作用相手との属性類似度が一般的信頼の形成に及ぼす影響について、検討することである。その際、本稿では、従来検討されてきた異民族との接触に加えて、同民族における属性類似度の影響にも着目する。それによって、コンタクト仮説 (Allport 1954)、コンストリクト仮説 (Putnam 2007)、複合型仮説 (金澤 2008) の比較検証を試みる。

2012年2月～3月にかけて東北地方の総合大学の学生を対象に実施した調査データを用いて、マルチレベル回帰分析を行った結果、第1に、出身地同質性の高い集団に所属する個人ほど、一般的信頼が高かった。第2に、異民族成員との友好関係、および内集団信頼と異民族成員との友好関係の交互作用項は、一般的信頼に作用しなかった。第3に、性別同質性の高い集団に所属する個人ほど、内集団信頼が高かった。

以上の知見は、コンストリクト仮説が主張するように、一般的信頼の形成に対して、同民族集団の属性同質性が重要な役割を果たす可能性を示唆している。

1 問題の所在

近年、豊かな社会実現の方途として、一般的信頼の機能が注目されている (cf. Putnam 2000)。一般的信頼とは、見知らぬ他者一般に対する人格的信頼 (他者の信頼性を判断する際のデフォルト値) のことである (山岸 1998)。その効果に関する実証研究は、個人レベルから社会レベルに至るまで、枚挙にいとまがない。たとえば、個人の健康 (Kawachi et al. 1999)、個人の生活満足度 (Uslaner 2002)、地域の災害復興 (Aldrich 2012)、州の制度パフォーマンス (Putnam 1993)、国家の経済発展 (Knack and Keefer 1997) などに正作用する。このような知見を受けて、一般的信頼などの実態を調査する国家や国際機関も存在する (e.g. Grootaert and Van Bastelaer 2002; Harper and Kelly 2003; 内閣府 2003)。ゆえに、一般的信頼をいかに形成するかが、社会的にも重要な課題といえよう。

それでは、一般的信頼はどのように形成されるのだろうか。その形成メカニズムを説明する立場は、2つに大別される (cf. Glanville and Paxton 2007; Hooghe 2007)。第1は、信頼を定常的な心理傾向として考える立場である (e.g. Couch and Jones 1997; Uslaner 2002)。彼らによると、信頼とは、心理的特徴にほかならず、先天的なものか、あるいは幼少期の社会環境から形成される。この立場では、現在の一般的信頼は、すでに確立された信頼に依拠するため、現時点での経

験とは無関係だと主張される。第2は、信頼を社会的学習の結果として考える立場である (e.g. Hardin 2002; Yosano and Hayashi 2005)。彼らによると、信頼は、過去の局所的な経験に左右されて、形成・再構築されうる。この立場では、複数の文脈における様々な他者との相互作用によって、局所的信頼が一般化すると主張される。

両立場のうち、一般的信頼は過去の局所的な経験に基づくとする説明（以後、経験一般化理論と呼ぶ）が、実証的に支持されている。Glanville and Paxton (2007) は、Social Trust SurveyデータとSocial Capital Benchmark Surveyデータを用いて、Confirmatory Tetrad Analysis¹から2つの立場の妥当性を直接検討した。その結果、信頼傾向が一般的信頼や局所的信頼を規定するモデルと比較して、局所的信頼が一般的信頼に作用するモデル、すなわち経験一般化理論に基づくモデルの適合度が、全サンプルにおいて優れていた。さらに、家族・近隣・同僚・教会・クラブ・商店の従業員に対する信頼のうち、近隣および商店の従業員への信頼が一般的信頼の形成に重要な役割を果たすことが示された。彼女らは、これらの知見を受けて、同質な近隣と比べて異なる社会的背景をもつ商店の従業員と接触することで、信頼が近隣から公共領域へと拡張すると解釈している。

ところが、Glanville and Paxton (2007) の研究では、近隣が同類であり、商店の従業員が異類であると言及されるものの、その証拠は存在しない。それにもかかわらず、彼女らは、相互作用相手の多様性（社会的属性の異なる他者との接触）が信頼を拡張すると強調する。他方、Yosano and Hayashi (2005) の研究では、近隣との固定的な相互作用が信頼を拡張すると指摘されるものの、近隣の属性類似度²については言及されていない。したがって、経験一般化理論の成立条件として、相互作用相手の多様性が不可欠なのか否かを検証する必要がある。「一般的信頼の形成において、多様性が必要なのか、それとも同質性で十分なのか」を解明することが重要なのは、社会全体において、見知らぬ他者同士が信頼し合うことで、「異質」な人々との協調社会 (i.e. 社会統合) が実現できると考えられてきたからである。

そこで、本稿では、相互作用相手との属性類似度が一般的信頼の形成に及ぼす影響について検討する。第2節では、先行研究の批判的検討を行い、本稿の検討課題を明示する。その後、経験一般化理論の成立条件に関する3つの仮説を提示する。第3節では、リサーチ・デザイン、分析に使用するデータ・変数・モデルを説明する。つづく第4節で有力仮説を検証する。第5節では、本稿の知見と意義をまとめ、今後の課題を提示する。

2 先行研究の批判的検討と仮説の提示

2.1 相互作用相手との属性類似度と一般的信頼

これまで、相互作用相手との属性類似度と一般的信頼に関する研究では、異なる3つの知見が報告されている。第1に、多様性が一般的信頼を促進するという知見である。そこでは、民族多様性（市区町村レベル：Kazemipur 2006; 近所レベル：Marschall and Stolle 2004）、言語多様性（国家レベル：Zak and Knack 2001; 近所レベル：Morales and Echazzara 2013）の効果が指

摘されている。第2に、同質性が一般的信頼を高めるという知見である。そのなかでは、民族同質性（国家レベル：Anderson and Paskevičute 2006; Delhey and Newton 2005; Finseraas and Jakobsson 2012; Knack and Keefer 1997; Zerfu et al. 2009; 郡レベル：Alesina and LaFerrara 2002; Costa and Kahn 2003; Dincer 2011; Gundelach and Traunmüller 2014; 近所レベル：Dinesen and Sønderskov 2011; Tolsma et al. 2009）、言語同質性（国家レベル：Anderson and Paskevičute 2006; Zerfu et al. 2009）、高ネイティブ率（国家レベル：Hooghe et al. 2009; 市区町村レベル：Dinesen and Sønderskov 2012; 近所レベル：Dinesen and Sønderskov 2011）、高マジョリティ率（国家レベル：Paxton 2007; 郡レベル：Gundelach and Traunmüller 2014; Håkansson and Sjöholm 2007）の影響が実証されている。第3に、多様性も同質性も一般的信頼を形成するという知見である。この知見は、相対的に少数ではあるものの、たとえば、近所での外国人との接触&ネイティブ近隣への愛着（個人レベル：金澤 2008）、民族多様性&言語同質性（近所レベル：Leigh 2006）、高ネイティブ率&高マイノリティ率での移民との接触（近所レベル：Stolle et al. 2013）の作用が示されている。このように、先行研究では、一貫した知見が得られていない³。

その原因として、従来の研究には、次の3つの方法論的問題を含むものが混在する点が考えられる（cf. Portes and Vickstrom 2011）⁴。第1の問題は、属性類似度の操作化が不十分な研究が存在する点である。とりわけ、ネイティブ／非ネイティブ率やマジョリティ／マイノリティ率を利用した研究が、これに該当する。この種の研究では、あるカテゴリと別のカテゴリを比較する割合が、指標として用いられる。つまり、この指標は、2つのうち、いずれが多いかを表すものに他ならない。このことは、現実の多様なカテゴリを恣意的に2つに分類することを意味する。仮に同じ割合であっても、白人と黒人しか存在しない文脈よりも、ネイティブと複数の非ネイティブが共存する文脈の方が、多様だと考えられる。このように、割合は量を表すには相応しいけれども、多様性などの質を表現するには適切ではない。したがって、質的多様性を表す尺度の利用が求められる。

第2の問題は、相互作用の範囲が不明確な研究が存在する点である。その典型例として、国家・郡レベルなどの大規模な範囲の属性類似度を用いる研究が挙げられる。これらの研究では、行為者にとって現実的な相互作用領域である、集団や近所における属性類似度の分布が、大規模な範囲の属性類似度と近似することを暗黙に想定している。ところが、その仮定は強すぎる。実際、国家レベルの多様性と一般的信頼との関係は、頑健ではない（Nannestad 2008）。そのうえ、小規模レベルの優位性を示す知見も存在する。一般的に、相互作用は、所属集団>近所>市区町村>地域・郡>都道府県・州>国家の順に生じやすい。Tolsma et al. (2009)によると、民族同質性の効果は、市区町村レベルでは存在しない一方、近隣レベルでは認められた。さらに、属性類似度の範囲を操作した研究では、調査対象者の住居250m範囲未満の民族同質性を統制すると、250m以上の民族同質性の効果が消失し、250m範囲未満の民族同質性の効果が依然として確認された（Dinesen and Sønderskov 2011）。したがって、集団や近所内部の相互作用を対象とする必要がある。

第3の問題は、一部の例外（金澤 2008; Marschall and Stolle 2004; Stolle et al. 2013）を除

き、相互作用の機会しか検討されていない点である。経験一般化理論では、一般的信頼の形成に対して、他者との相互作用経験 (i.e. 対面接触) が、重要な独立変数となる。ところが、仮に多様性が高い近所であっても、セグリゲーションが存在する場合には、相互作用は起こらない (Uslaner 2011)。実際、多様性よりもセグリゲーションの重要性を示唆する研究も存在する (e.g. Rothwell 2012; Uslaner 2011)。そのため、対面接触の影響を検討する必要がある (Hooghe 2007; Uslaner 2011)。このように、上記3つの方法論的問題を含む研究の知見には、疑念が残る。したがって、経験一般化理論の検証には、少なくとも、属性類似度を測定し、相互作用の範囲を明確に規定し、実際の相互作用の有無を捉える必要がある。

上記の方法論的問題に加えて、先行研究では、おもに、民族類似度しか検討されていない。その背景には、一般的信頼を醸成するのは「民族」多様性か否 (同質性) かという論争が、これまで存在してきたからである。そのため、従来の研究は、民族類似度の効果に執着するあまり、それ以外の属性類似度を看過してきたきらいがある。これが問題になるのは、とくに、民族同質性が一般的信頼に正作用する場合である。上述のように、先行研究では、民族同質性の効果を実証した知見が多数を占める。ところが、そのメカニズムについては、単に同類原理が働くという粗い解釈を除き、未解明のままである (Van der Meer and Tolsma 2014)。この点に対して、次のような疑問が浮かぶのは、至極当然であろう。はたして、同じ民族の他者ならば、相互作用する相手は誰でも良いのだろうか。さもなければ、同じ民族の中でも、どの属性類似度が一般的信頼に作用するのだろうか。この問いを従来の研究とともに整理すると、本来検証すべき課題は、以下の2点を同時に比較検討するものに他ならない。それぞれ、(1) 異なる民族との相互作用の影響、(2) 同じ民族との相互作用のうち、その他の属性類似度の影響である。

以上を踏まえて、本稿では、従来検討されてきた異民族との接触に加えて、同民族における属性類似度の影響にも着目して、一般的信頼の形成メカニズムに関する経験一般化理論の検証を検討課題とする。

2.2 経験一般化理論の成立条件に関する3つの仮説

これまで、経験一般化理論の成立条件に関して、相互作用相手との属性類似度を強調した仮説は、3つ存在する。それぞれ、コンタクト仮説 (Allport 1954)、コンストラクト仮説 (Putnam 2007)、複合型仮説 (金澤 2008) である。以下では、諸仮説について説明し、本稿での分析枠組み (図1) を提示する。

第1は、コンタクト仮説 (Allport 1954) である。Allport (1954) によると、人々は、次の条件下で外集団成員と対面接触することにより、外集団への偏見を解消する。その条件とは、[1] 集団間の対等な地位・立場、[2] 集団間の共通目標、[3] 共通目標の達成にむけた集団間協力、[4] 集団間の相互作用を促すような制度的環境、の存在である。この仮説は、元来、民族集団間における偏見解消の方途に言及したもののだが、後続の研究では、異民族成員との接触が、様々な意識や態度 (e.g. 信頼や寛容性の涵養、不安や脅威の低減) に有効だと実証されており (cf.

Pettigrew et al. 2011)、一般的信頼を説明する仮説としても、一定の地位を得ている。ただし、オリジナル (Allport 1954) では、肝心のメカニズムが説明されていない。

それを補うために、Pettigrew (1998) は、従来¹の知見に基づき、対面接触から偏見解消に至る過程を整理している。異民族 (外集団) 成員との接触によって、異民族に関する新しい情報を獲得する機会が生じる。相互交流が繰り返されるにつれて、特定の異民族成員への受容 (i.e. 個別的信頼) とともに、彼らとの情緒的な関係 (i.e. 強い紐帯) が築かれるようになる。この過程で、個人は、これまで抱えてきた古い情報 (偏見) と新しい情報 (個別的信頼) との間で生じた、認知的不協和の解消に迫られる。その際、個人を偏見解消へと導くのが、強い紐帯に基づく正の感情 (e.g. 親密さ、共感、尊敬) である。このようにして、対面接触は異民族へのネガティブな態度を訂正し、異民族への信頼を形成するのに役立つのである。以上のメカニズムを踏まえて、Pettigrewは、不安の低減と共感を同時にもたらすような「集団間の友情」こそ、Allport (1954) の4条件を集約しうる最重要条件だと主張する (Pettigrew 1998)。したがって、この仮説では、集団間交流における異民族成員との友好関係が鍵変数となる。

さらに、異民族成員との接触は、同民族 (内集団) とは異なる価値観を個人に提供する可能性をもつ。それによって、個人は、より広い世界観を形成するようになり、これまで絶対視してきた内集団の規範や慣習を相対評価するようになる。このように、個人は、異民族成員との友好関係によって、内集団へのバイアスを低減させると同時に、より一般的な信頼を形成するのである。したがって、コンタクト仮説は、次の3つの仮説を同時に満たすと予想する。

仮説 1-1：異民族成員との友好関係が多い個人ほど、内集団信頼が低い。

仮説 1-2：異民族成員との友好関係が多い個人ほど、一般的信頼が高い。

仮説 1-3：内集団信頼と一般的信頼との間には、負の相関関係がある。

第2は、コンストリクト仮説 (Putnam 2007) である。Putnam (2007) によると、多様な近隣集団のなかで過ごす人々は、他者に対する信頼を形成しにくい。そのような環境下では、社会的な不確実性が高く、社会的孤立が生じやすいため、人々は近隣集団内部の成員との接触を回避し、隠遁する傾向にある。それゆえ、近隣集団の多様性は内集団への信頼も一般的信頼も醸成しにくいのだと、Putnam (2007) は主張する。実際、予測不可能な状況、不確実な状況、ヴァルネラビリティの高い状況では、信頼が発達しにくい (Hooghe 2007)。

翻って、近隣集団の同質性は、個人の信頼形成の基盤となる。人々は、予測可能かつ慣れ親しんだ状況において、信頼を発展させる (Lewis and Weigert 1985)。そのような状況とは、似た者同士やお互いのことをよく知っている者同士の相互作用状況をさす (Hooghe 2007)。そのため、日常的な相互作用の場としての近隣集団内部の成員が同質なほど、信頼が育まれやすい。近隣集団の同質性が信頼形成に及ぼす影響は、内集団への信頼にとどまらず、外部の他者へと副次的に派生し、見知らぬ他者へと一般化する可能性をもつ。とくに、同質性のなかでも、外集団との違いが際立つ民族同質性に加えて、出身背景、性別、年齢、職業などの同質性が重要となる (Putnam 2007)。この点を本稿の検討課題と併せて考えるならば、同民族集団内部の属性同質性

が信頼形成を加速させることが、コンストリクト仮説から導出される。したがって、この仮説は、次の3つの仮説を同時に満たすと予想する。

仮説2-1：属性同質性の高い同民族集団に所属する個人ほど、内集団信頼が高い。

仮説2-2：属性同質性の高い同民族集団に所属する個人ほど、一般的信頼が高い。

仮説2-3：内集団信頼と一般的信頼との間には、正の相関関係がある。

第3は、複合型仮説（金澤 2008）である。金澤（2008）によると、一般的信頼は、二段階の過程を通じて形成される。第1段階は、不信から内集団への信頼に至る過程である。個人は、同質な内集団成員との緊密な相互作用環境に身を置くことで、内集団への信頼を形成する。ただし、信頼の対象は、あくまでも内集団に限られる。第2段階は、内集団への信頼から一般的信頼に至る過程である。同質な内集団への信頼を形成した個人は、集団間を架橋する紐帯（e.g. 外集団との集団間交流）を経由して、社会的属性の異なる他者と接触することにより、他者一般への信頼を形成する。このように、複合型仮説では、近隣集団の同質性が内集団への信頼を形成し（i.e. 第1段階の過程）、内集団への信頼を形成した個人が、内集団の紐帯を通じて異質な他者と相互作用することで一般的信頼を形成する（i.e. 第2段階の過程）、という信頼の段階的メカニズムを考える⁵。

複合型仮説は、上記2つの仮説（コンタクト仮説、コンストリクト仮説）を踏まえると、同民族集団の属性同質性が内集団（同民族）への信頼を形成し、内集団信頼の高い個人が異民族成員との友好を築くなかで一般的信頼が形成されることと、同義である。実際、金澤（2008）では、日本人を母集団として、同質な内集団と異質な他者との接触を、それぞれ日本人の近隣住民、外国人との接触と操作化している⁶。したがって、複合型仮説は、次の3つの仮説を同時に満たすと予想する⁷。

仮説3-1：属性同質性の高い同民族集団に所属する個人ほど、内集団信頼が高い。

仮説3-2：内集団信頼が高く、かつ、異民族成員との友好関係が多い個人ほど、一般的信頼が高い。

仮説3-3：内集団信頼と一般的信頼との間には、正の相関関係がある。

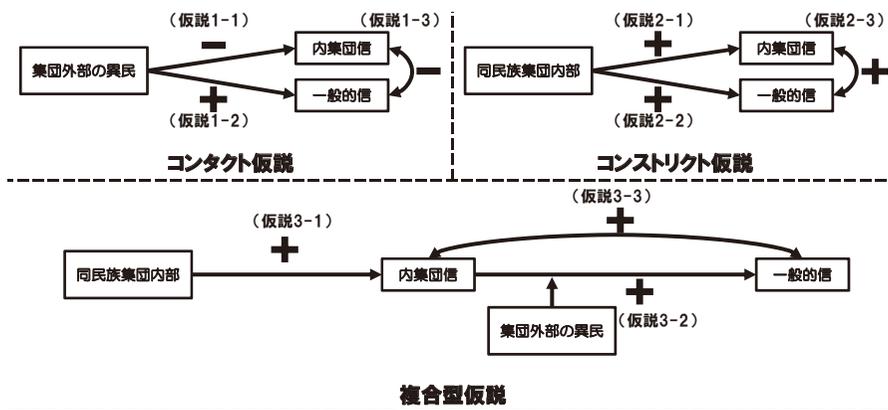


図1 一般的信頼の形成メカニズムに関する経験一般化理論の諸仮説

3 方法

3.1 仮説検証にむけたリサーチ・デザイン

以上の仮説を検証するために、本稿では、同じ民族からなる集団を調査対象に設定する。その理由は、次の3点である。第1は、集団内部における同民族成員の属性類似度を測定するためである。それらを質的多様性の尺度に適用することで、コンストラクト仮説と複合型仮説が検討可能になる。他方、調査対象の規模が集団よりも大きい場合、成員の属性を測定することが難しくなる。第2は、集団活動が現実的な相互作用状況だからである。上述のように、相互作用は、所属集団において最も生じやすい。そのため、調査対象者にとって日常的な相互作用領域である所属集団を的確に選定するならば、集団内部の成員間の相互作用を「先行研究のように仮定」する必要はない。第3は、同民族集団内部の属性同質性の効果と集団外部の異民族成員との友好関係の効果を区別するためである。メンバーシップと民族との対応関係に基づき、両者の境界線を明確に定めることで、コンタクト仮説とコンストラクト仮説を厳密に比較することができる。このように、同民族集団を対象にすることで、先行研究の方法論的問題を克服すると同時に、3つの仮説を比較検証することが可能となる。

さらに、本稿の調査設計では、同民族集団のうち、一大学内部における複数のサークル・クラブ集団を選定する。その利点は、次の3点である。第1は、対象を大学生集団に統一することで、年齢と職業階層を統制できるためである。Putnam (2000) によると、集団に参加する人ほど、一般的信頼が高い。ところが、集団参加が一般的信頼を育むのではなく、高信頼者が集団参加する可能性がある (Bekkers 2012; Stolle and Hooghe 2004)。とくに、高年齢層や高職業階層ほど、一般的信頼が高い (Li et al. 2005; 岩淵 2008)。そのため、複数の集団を対象に一般的信頼の形成を検討する際、集団内部に多様な年齢層や職業階層をもつ成員が含まれる場合に、問題が生じる。なぜなら、一般的信頼が集団参加に基づく相互作用によって形成される効果だけでなく、もともと高信頼者である高年齢層や高職業階層の混在による疑似効果も含まれるからである。それに対して、成員の年齢層・職業階層が等しい集団を扱えば、上記のような問題は生じない。したがって、本稿では、年齢層と職業階層を統制するために、大学生のサークル・クラブ集団を対象にする。さらに、集団外部の異民族に関しても、外国人留学生を選定することで、コンタクト仮説における集団間の対等な地位を担保できる。

第2は、多くの大学生にとって、サークル・クラブ集団が代表的な相互作用領域だからである。大学生の集団活動には、おもに、正課活動におけるクラス・ゼミ・研究室、正課外活動におけるサークル・クラブ、ボランティア、アルバイトが挙げられる。なかでも、サークル・クラブは、明確なメンバーシップをもつ大学生集団である。大学生の7割程度がこのような集団に所属しており (日本私立大学連盟 2011; 2015)、そこでの活動は大学生活を充実させる上で大きな役割を果たしている (橋本ら 2010)。ゆえに、サークル・クラブ集団を扱うことで、大学生の日常的な集団的相互作用を捉えることができる⁸。

第3は、同じ文脈（e.g. 社会構造）を共有する集団間の効果を比較できるためである。従来、相互作用の範囲（e.g. 近隣集団）における多様性の効果を検討する場合、広範囲に点在する集団同士が比較されてきた。このとき、各集団の存立する文脈が異なる点に留意するならば、各文脈の影響を統制したうえで、集団間比較を行う必要がある。ところが、たとえ集団よりも上位の文脈を測定できたとしても、その範囲（e.g. 行政区）が、当該集団やその成員に作用する文脈と一致するとは限らない。他方、同じ学校に存立する集団群を扱えば、上記の問題は生じない。したがって、一大学内部の複数集団を対象にする。

3.2 使用するデータと分析対象者

分析には、2012年2月～3月にかけて東北地方の総合大学1校の学生を対象に実施した、質問紙調査のクロスセクショナルデータを用いる。この調査の手続きは、以下の通りである。本調査にあたり、調査当時の筆者の所属先大学院・研究科倫理委員会、調査対象大学の学友会文化部・体育部部长の各教員と学生支援課から調査許可を得た。そして、学友会全117団体から、20団体を無作為抽出した。学生支援課の協力により、20団体の学生代表の承諾を受けて、各代表に調査実施の依頼をした。その後、筆者が各団体を訪問し、「大学生のサークル・クラブ活動に関する調査」というタイトルで、集合調査および留め置き調査を実施した。教示では、調査票を受け取った団体について回答すること、回答は任意かつ途中で辞退可能であること、調査協力者の匿名性確保・プライバシー保護の遵守などについて説明した。調査項目には、個人属性に関する項目、集団での活動状況、信頼などが含まれる。調査の結果、18団体123名から回答が得られた。そのうち、集団のメンバーが2名以上かつリストワイズ除去法による欠損値がない、10団体113名を対象に分析を行う。

3.3 使用する変数

従属変数は、「一般的信頼」である。この変数は、「たいていの人は信頼できる」という質問に対して、4件法（そう思う：4点、どちらかといえばそう思う：3点、どちらかといえばそう思わない：2点、そう思わない：1点）で回答を求めた⁹。

独立変数には、次の5変数を用いる。第1は、「集団の出身階層多様性」である。この変数は、成員の15歳時における世帯主の職業8分類（専門・技術、管理、事務、販売、サービス、生産現場・技能、運輸・保安、その他）を質的多様性尺度HI（Herfindahl Index: Hirschman 1964）を用いて集団ごとに算出し、その値を同じ集団の成員に割り当てた。第2は、「集団の性別多様性」である。この変数も、成員の性別をHIを用いて集団ごとに算出し、その値を同じ集団の成員に割り当てた。第3は、「集団の出身地多様性」である。この変数も、成員の出身地（都道府県）をHIを用いて集団ごとに算出し、その値を同じ集団の成員に割り当てた。HIは次式から計算する。

$$HI = \frac{k}{k-1} \left(1 - \sum_{i=1}^k p_i^2 \right)$$

ここで、 k はカテゴリー数、 p は i 番目のカテゴリーに所属する成員の比率を表す。HIは、当該集団成員がもっとも多様なときに1の値をとり、全く同質なときに0の値をとる。以上の変数を同民族集団内部の属性多様性として用いる。これら3つの変数を用いる理由は、以下の通りである。上述のように、民族、出身背景、性別、年齢、職業の同質性が信頼を促進する可能性がある（Putnam 2007）。そのため、これらの変数をすべて用いることが望ましい。ただし、本稿では、仮説検証にむけたりサーチ・デザインに基づき、同民族における同じ年齢層・職業階層からなる集団を調査対象とする。そこで、本稿では、その他の変数、すなわち、出身背景と性別の多様性を用いる。一般的信頼と関連のある出身背景については、日本の文脈において、出身階層（岩淵 2008）と地域差（稲垣 2009）の重要性が指摘されている。したがって、本稿では、出身背景を表す変数として、出身階層と出身地を用いる。第4は、「集団活動で形成された集団外部の学内留学生との紐帯数」（以下、留学生との紐帯数と略記）である。この変数の測定では、「サークル・部活動を通じて交流したり、紹介された人のうち、『集団外部』の学内留学生」の友人総数を求めた。つまり、サークル・クラブ活動の場において紐帯を結んだ、集団外部の学内留学生の数を表す。調査対象者（大学サークル・クラブの成員）にとって、この種の学内留学生は、年齢層と職業階層（大学生）が同質である一方、民族の点で明らかに異質である。ゆえに、この変数は、集団外部の異民族成員との友情の量（友人総数）を表す点で、コンタクト仮説や複合型仮説が想定する「集団間の交流・紐帯に基づく異民族成員との友好関係」の概念と一致する。したがって、この変数を集団外部の異民族成員との友好関係として用いる。第5は、「内集団信頼」である。この変数は、「サークル・部のメンバーは、信頼できる」という質問に対して、4件法（そう思う：4点～そう思わない：1点）で回答を求めた。この変数は、一部の仮説を検証する分析過程において、従属変数として扱われる点に注意されたい。

統制変数には、一般的信頼および内集団信頼に影響を及ぼす可能性のある3変数を用いる。第1は、「女性ダミー」である。性別は、男性を基準カテゴリとして、女性を1点、男性を0点とした。第2は、「学年」である。この変数は、調査対象者である大学生の学年について、11件法（1年：1点、2年：2点、3年：3点、4年：4点、5年：5点、6年：6点、M1年：7点、M2年：8点、D1年：9点、D2年：10点、D3年：11点）で回答を求めた。第3は、「外向性」である。この変数の測定には、性格尺度Big5の日本語版（和田 1996）を利用した。この尺度は、「社交的」、「外向的」、「話好き」などSD法に基づく12項目の質問に対して、5件法（非常にあてはまる：5点～非常にあてはまらない：1点）の合成変数から構成される（クロンバックの α 係数 = .849）。この日本語版尺度の妥当性は、先行研究でも確認されている（齋藤ら 2001）。Savelkoul et al. (2011)によると、外向的な個人は、様々な人々（異質な他者も含む）と接触する傾向が強く、その結果として、信頼を高める可能性がある。そのため、この変数を統制する。

表 1 記述統計

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	①との相関	①VIF	②との相関	②VIF
①一般的信頼	2.80	.87	1	4	—	—	—	—
女性ダミー	.35	.48	0	1	.17 +	1.23	.11	1.23
学年	1.98	.81	1	4	.06	1.07	-.12	1.06
外向性	3.20	.61	1.50	4.83	.22 *	1.06	.17 +	1.05
集団の出身階層多様性	.87	.10	.57	.97	-.02	2.00	.08	2.00
集団の性別多様性	.32	.33	0	.86	-.19 *	1.21	-.15 +	1.20
集団の出身地多様性	.87	.10	.51	.93	-.07	2.05	.06	2.05
留学生との紐帯数	.68	2.26	0	20	-.01	1.07	.09	1.06
②内集団信頼	3.33	.77	1	4	.60 ***	1.04	—	—

注：N = 113, + p < .10, * p < .05, *** p < .001.

表 1 は、分析で使用する変数の記述統計を示したものである¹⁰。一般的信頼の分布は、Kolmogorov-Smirnov testの結果、歪度は.05、尖度は.34であり、正規分布であった (p > .10)。性別（女性ダミー）では、男性の方がやや多い傾向にあった。学年では、対象者が大学1年から4年までに限られた。大学2年生を中心に分布しており、1年～3年で全体の約68%を占めていた。外向性では、尺度値の中心付近に分布していた。集団の出身階層多様性では、全体的に、さまざまな出身階層の成員からなる集団が多かった。集団の性別多様性は、やや同質的であり、同性集団も存在した。集団の出身地多様性では、多様な出身地をもつ成員から構成される集団が多かった。留学生との紐帯数では、平均値が.68と少ない一方で、一部の人のみ20人と多かった。この変数をそのままモデルに投入すると、外れ値によって係数にバイアスが生じる可能性がある。そのため、分析には、この変数を対数変換したものをを用いる。内集団信頼については、平均値が最大値（4点）に近かった。つまり、どの集団でも、平均的に内集団信頼は高い傾向にあった。

表 1 には、各仮説にかかわる変数間の単相関も示した。まず、「①一般的信頼」と単相関が認められたのは、それぞれ、女性ダミー、外向性、集団の性別多様性、内集団信頼であった。すなわち、女性の方が、外向性が高い個人ほど、性別多様性の低い集団に所属する個人ほど、内集団信頼が高い個人ほど、一般的信頼が高い。とくに、内集団信頼と一般的信頼との間には、正の強い有意な相関が認められた（仮説 2 - 3 と仮説 3 - 3 支持）。次に、「②内集団信頼」と単相関が認められたのは、それぞれ、外向性、集団の性別多様性であった。すなわち、外向性が高い個人ほど、性別多様性の低い集団に所属する個人ほど、内集団信頼が高い。

以上の結果から、コンタクト仮説が棄却された。コンタクト仮説は、異民族との友好関係が一般的信頼を促進し（仮説 1 - 2）、同民族の内集団信頼と一般的信頼の間には負の相関があり（仮説 1 - 3）、異民族との友好関係が内集団信頼を阻害する（仮説 1 - 1）と予想する。ところが、いずれの下位仮説も支持されなかった。

それに対して、表 1 の結果のみでは、コンストリクト仮説と複合型仮説のいずれが支持されるか判断できない。さらに、現段階では、その他の要因を統制していない。そのため、次節では、コンストリクト仮説と複合型仮説の成否を検討するために、多変量解析を行う。

3.4 推定モデル

本稿では、仮説検証の方法として、マルチレベル回帰分析を用いる。従来、集団内部の属性類似度のような集団レベル変数（集団ごとに異なる変数）の効果を検討する場合には、マルチレベル分析が活用されてきた。その理由は、2つある。第1は、集団間の異質性を考慮するためである。信頼の水準は、集団ごとに異なる可能性がある。そこで、集団レベルの独立変数以外の集団差（集団レベルのランダム切片）もモデルに含める。第2は、集団レベル変数における標準誤差の推定の際に、同レベルの自由度を用いるためである。集団単位で無作為抽出した標本を重回帰分析する場合、全変数の標準誤差の推定には、個人レベルの自由度が用いられるため、集団レベル変数が有意になりやすくなるという問題が生じるからである。さらに、この問題に関連して、集団内相関に伴う不均一分散にも対処するために、ロバスト標準誤差を用いる。

4 分析結果

表2は、内集団信頼および一般的信頼を従属変数とするマルチレベル回帰分析の結果を示したものである。この分析では、コンストラクト仮説と複合型仮説を検証する。

まずは、コンストラクト仮説の成否を確認する。モデル1は、コンストラクト仮説の仮説2-1（集団の属性同質性が内集団信頼に及ぼす影響）を表したものである。分析の結果、内集団信頼に対して、外向性、集団の性別多様性が有意な効果をもっていた。つまり、外向性が高い個人ほど、性別多様性の低い（同質な）集団に所属する個人ほど、内集団信頼が高かった（仮説2-1支持）。モデル2は、コンストラクト仮説の仮説2-2（集団の属性同質性が一般的信頼に及ぼす影響）を表したものである。分析の結果、一般的信頼に対して、女性ダミー、集団の出身地多様性、内集団信頼が有意な効果をもっていた。つまり、女性の方が、出身地多様性の低い（同質な）集団に所属する個人ほど、内集団信頼が高い個人ほど、一般的信頼が高かった（仮説2-2支持）。なお、集団の出身地多様性と一般的信頼との間の関連は、単相関（表1）では見られなかった。表1のVIFを確認する限り、多重共線性によるバイアスの可能性は低い。ゆえに、この関連は、諸変数を統制することによって生じる疑似無相関だと判断される。

次に、複合型仮説の成否を確認する。モデル3は、複合型仮説の仮説3-1（集団の属性同質性が内集団信頼に及ぼす影響）を表したものである。分析の結果は、モデル1と同様であった。つまり、外向性が高い個人ほど、性別多様性の低い（同質な）集団に所属する個人ほど、内集団信頼が高かった（仮説3-1支持）。モデル4は、複合型仮説の仮説3-2（内集団信頼×留学生との紐帯数の交互作用項が一般的信頼に及ぼす影響）を表したものである。分析の結果は、モデル2と同様であった。つまり、女性の方が、出身地多様性の低い（同質な）集団に所属する個人ほど、内集団信頼が高い個人ほど、一般的信頼が高かった。他方、内集団信頼×留学生との紐帯数の交互作用項には、正の有意な効果が確認されなかった（仮説3-2棄却）。

以上の結果から、コンストラクト仮説が支持された¹¹。

表 2 信頼を従属変数とするマルチレベル回帰分析

	コンストラクト仮説				複合型仮説			
	内集団信頼 モデル1		一般的信頼 モデル2		内集団信頼 モデル3		一般的信頼 モデル4	
	<i>B</i>	<i>Robust S.E.</i>						
女性ダミー	.06	.06	.25 *	.12	.02	.06	.25 *	.12
学年	-.12	.08	.14	.10	-.12	.07	.12	.11
外向性	.19 *	.08	.17	.14	.20 *	.09	.16	.14
集団の出身階層多様性	.72	.84	1.32	.85	.89	.90	1.11	.80
集団の性別多様性	-.27 **	.11	-.04	.17	-.32 **	.11	-.02	.16
集団の出身地多様性	-.50	.94	-2.34 *	.92	-.47	.97	-2.23 **	.86
留学生との紐帯数	.10	.11	-.10	.06			-.05	.08
内集団信頼			.66 ***	.05			.62 ***	.06
内集団信頼×留学生との紐帯数							-.33	.29
個人レベルの定数項	-.50	.45	2.80 ***	.89	-.68	.44	2.98 ***	.88
集団レベルのランダム切片	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00
Wald χ^2	32.8 ***		709.7 ***		16.8 *		945.9 ***	
Log pseudolikelihood	-126.62		-113.61		-126.94		-112.3	
N (Group N)	113 (10)		113 (10)		113 (10)		113 (10)	

注 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$. *B* は、非標準化係数を表す。

5 考察

本稿の目的は、相互作用相手との属性類似度が一般的信頼の形成に及ぼす影響について、検討することである。その際、本稿では、従来検討されてきた異民族との接触に加えて、同民族における属性類似度の影響にも着目する。この検討課題に対して、大学サークル・クラブ集団からアプローチすることで、先行研究の方法論的問題を克服するとともに、経験一般化理論の成立条件に関する3つの仮説を比較検証する。この分析を通して、「一般的信頼の形成において、多様性は必要なのか」というリサーチ・クエスチョンにこたえる。

本稿の知見は、以下の3点である。第1に、出身地同質性の高い集団に所属する個人ほど、一般的信頼が高かった。その理由として、同類原理を基盤とした2つのメカニズム—直接経験一般化と間接経験一般化—が考えられる。1つ目は、行為者が自身の直接的な信頼経験を一般化するメカニズムである。一般的に、二者間関係では、共通点が多いほど、相互作用が生じやすく、紐帯が築かれやすい (McPherson et al. 2001)。この傾向は、集団内部においても同様である (McPherson and Smith-Lovin 1987)。二者間関係のなかでも、同郷出身者の間では、社会文化的背景に関する共通点が豊富である可能性が高い。そのため、出身地同質性の高い集団ほど、成員間における慣習・規範・価値・言語 (方言)・話題の共有が多くなる。このような文脈において、成員は、内集団を越えた同郷意識のような文化的アイデンティティに基づく相互作用により、自身の信頼の範囲を拡大するようになる。ところが、以上の説明だけでは、同郷者から他者一般へと信頼が拡張する過程がブラックボックスのままである。この説明を補う2つ目の可能性と

して、他者の間接的な信頼経験を一般化するメカニズムが考えられる (e.g. Wright et al. 1997)。青年期における個人の意識や態度は、サークル・クラブやクラスメートなどのピアとの相互作用を通じて、同化しやすい (Coleman 1961)。また、信頼は評判にも依存する (Dasgupta 2000)。文化的アイデンティティを共有する集団では、そうでない集団よりも、成員間の規範・価値が類似するため、他成員の信頼経験やその評判に対する共感・同調が生じやすくなるだろう。そのような共感・同調が集団内部で蓄積するに伴い、他成員の間接的な信頼経験が、自身の他者一般に対する信頼へと組み込まれた結果として、信頼が一般化するのである。

第2に、異民族成員との友好関係は一般的信頼の形成に作用しなかった。この知見は、次の理由によると考えられる。本稿の分析対象者にとって、全ての外国人留学生が等しく異質だとは限らない。たとえば、アジア人留学生よりも、欧米人留学生やアフリカ人留学生の方が、異質だと認知されるかもしれない。残念ながら、本稿の調査データでは、この点に関する情報が不足している。本稿の調査対象大学における留学生の約8割がアジア人であるため、仮に日本人大学生が、集団活動を通して留学生とランダムに接触するならば、民族的同質性の高いアジア人と相互作用する確率が高くなるだろう。このように、本稿では、異民族成員との接触を捉えているけれども、異民族成員における民族的異質性は低い可能性がある。ただ、ある民族に対する異質性認知は、当該民族への態度に左右される (内生性バイアス) ため、その測定は難儀である (Van der Meer and Tolsma 2014)。また、Pettigrew (2009) によると、異民族との相互作用に基づく経験一般化の効果は、当該異民族とステレオタイプ・地位・スティグマの類似する非接触異民族に限られる。そのため、先行研究で検討されてきたような黒人―白人間などの相互作用状況と比較すると、本稿の文脈では、異民族成員との友好関係に基づく信頼の一般化効果は、極めて弱いかもしれない。したがって、今後は、複数の異民族成員との接触効果を検討する必要がある。

第3に、各信頼に正作用する属性同質性の変数が異なっていた。集団の性別同質性が内集団信頼を促進する一方で、集団の出身地同質性が一般的信頼を促進していた。内集団信頼の形成では、金澤 (2008) が指摘するように、内集団成員間の緊密な紐帯形成を促すような属性同質性があれば十分である。とりわけ、性別や年齢の同質性が集団内部の紐帯形成を促す (McPherson and Smith-Lovin 1987) 点を踏まえると、性別同質性が内集団信頼を形成するメカニズムは、比較的容易に理解できる。他方、一般的信頼の形成においては、属性同質性のなかでも、生活様式や規範・価値の共有と密接に関わるような同質性 (e.g. 出身地、宗教) が重要な基盤となりうる。というのも、上述のように、集団内部において他者一般への態度に関する共感・同調を引き出すには、成員間での規範・価値の共有が不可欠だからである。このように、第3の知見は、属性同質性のタイプによって、形成される信頼のタイプが異なる可能性を示唆している。

以上の知見は、コンストリクト仮説が主張するように、同民族集団における属性同質性の重要性を強調している。先行研究では、おもに、民族類似度の影響しか検討されてこなかった。そのため、同民族との相互作用が一般的信頼を形成することを示す研究では、同民族の属性のうち、どの属性多様性・同質性が信頼を一般化するのかに関するメカニズムが謎のままであった。それ

に対して、同民族集団における属性類似度の影響を検討した本稿では、集団の出身地同質性が成員間の規範・価値の共有を促すことで直接的・間接的な信頼経験を一般化するようなメカニズムの可能性が、大学サークル・クラブのような集団で明らかになった。さらに、内集団信頼と一般的信頼に影響を及ぼす属性同質性のタイプが異なることから、コンストラクト仮説が成立するには、属性同質性に関する条件が必要である点も確認された。このように、本稿の知見は、一般的信頼の形成メカニズムを理解するためには、多次元の属性類似度を検討する必要があることを示唆している。

結論として、本稿は、大学サークル・クラブのような集団では、「一般的信頼の形成において、多様性は必要ない」、すなわち、同質性で十分であるけれども、同質性が信頼を一般化するための条件は必要だと主張する。ただし、本稿の調査対象は、先行研究の方法論的問題を克服するために、さらに、年齢と職業階層を統制し、複数集団を同じ文脈で比較するために、一大学内部のサークル・クラブ集団の成員に限られる¹²。そのため、知見の一般化には、留保が必要である。同様の理由から、本稿では、比較的少数の属性類似度しか検討できなかった。また、本稿の知見は、クロスセクショナルデータに基づくものであるため、一般的信頼の規定要因の範疇に留まる。とはいえ、本稿は、多次元の属性類似度の検討価値を先行研究に付与した点で、一定の意義をもつ。今後は、さまざまな近隣・集団を対象に、一般的信頼の形成に対する多様な属性類似度の因果効果を精査する研究が求められよう。

謝辞

本稿は、JSPS特別研究員奨励費24・4475の助成を受けて行った研究の一部である。本稿の草稿に対して、金澤悠介先生（立命館大学）から有益な助言をいただいた。最後に、調査対象大学の学友会教員・生活支援課・調査協力者から、本調査の全過程で支援を受けた。以上の方々に対して、記して謝意を表する。

注

- (1) 4つの確率変数 (e.g. A, B, C, D) 間における、ある共分散の積 (e.g. $\sigma_{AB} \sigma_{CD}$) と別の共分散の積 (e.g. $\sigma_{AD} \sigma_{BC}$) の差が0か否かを複数組考えることで、本来入れ子関係にないモデル間の適合度比較を可能にする方法をさす (cf. Bollen and Ting 1993)。構造方程式モデルでは、ある制約を課したモデルとそうでないモデルとの間の適合度を尤度比検定により比較可能である。ところが、その条件として、後者が前者にネストされている必要がある。この条件を満たさない場合には、Confirmatory Tetrad Analysisによって、適合度を比較することができる。
- (2) 属性類似度とは、自分と他者の社会的属性がどのくらい似ているのか（同質性）、異なるのか（多様性）という程度を表す概念である。本稿では、属性類似度のうち、他者と異なる属性を強調する場合には多様性を、他者と同じ属性を強調する場合には同質性を用いる。また、類似度・同質性・多様性の下位概念として、○○類似度 (e.g. 民族類似度)、○同質性 (e.g. 性別同質性)、○○多様性 (e.g. 出身地多様性) という表現を用いる。
- (3) 以上の知見は、多様性・同質性と一般的信頼との間の線形関係を示すものである。ただし、非線形関係を示唆する研究も一部存在する (e.g. Zak and Knack 2001)。
- (4) 別の可能性も考えられる。たとえば、母集団の違いや各種バイアスによる影響が挙げられよう。前者では、調査対象となる国民やサンプリングの範囲によって、結果が異なる可能性がある。ところが、これまでの研究では、同一母集団の

間でも、知見が散在している。後者では、選択バイアスや同時性バイアスの可能性がある。同質性と一般的信頼との間の関係は、居住地の選択バイアスによるものかもしれない。また、多様性と一般的信頼との間の関係は、一般的信頼の高い個人が多様な他者と接触するだけ（同時性バイアス）かもしれない。

- (5) この仮説は、マクロレベルの同質性を強調するコンストラクト仮説とミクロレベルの多様性を強調するコンタクト仮説を統合する意味で、「複合的」である。
- (6) ただし、複合型仮説は、金澤（2008）の検証課題ではなく、検証課題に関する2つの対立仮説と分析結果の統合により提唱されたものである。そのため、彼の研究では、内集団（日本人の近隣住民）内部の同質性は、測定されていない。
- (7) なお、複合型仮説は、近隣集団の文脈に対する含意として、次の2つの予測を立てる。第1の予測は、近隣集団内部において、異質な成員間の緊密な相互作用構造が存在する場合に、当該成員間の一般的信頼が上昇するというものである。第2の予測は、同質な近隣集団内部において、成員間の緊密な相互作用構造が存在し、かつ、外部の異質な他者とも多くのつながりが存在する場合に、当該成員間の一般的信頼が上昇するというものである。これら2つの予測うち、本稿では、後者を採用する。というのも、第1の予測には、第1段階（同質な内集団への条件付き信頼形成）の過程が含まれないからである。上述のように、複合型仮説は、2段階の信頼形成メカニズムを想定している。それに対して、第1の予測が示すのは、複合型仮説が成立したときに生じるであろう「別の帰結」に他ならない。
- (8) 集団の活動内容や活動頻度によって、成員間の相互作用状況に差が生じる可能性がある。そのため、本稿では、そのような集団差による影響をマルチレベル分析（ランダム切片モデル）から対処する。
- (9) 一般的信頼の測定における「たいていの人」の範囲は、個人や国家によって異なる可能性がある（Delhey et al. 2011）。そのため、本稿を含む、先行研究全体には、一般的信頼の測定妥当性に関する限界がある。
- (10) 共線性診断の結果、全説明変数において、VIFが3未満であった。この数値は、Fox（2008）の基準（ $\sqrt{VIF} < 2$ ）を満たす。ゆえに、多重共線性は問題にならないと判断される。
- (11) 念のため、以上4つのモデルについて、重回帰分析を行ったところ、同様の結果が得られた。なお、各モデルの R^2 値はそれぞれ、0.07、0.42、0.07、0.43であった。
- (12) 本稿のサンプルサイズは、少数である。この場合、検出力の低下に伴い、大標本ならば有意差が存在したはずの変数において、有意差が認められなかった可能性がある。

文献

- Aldrich, D. P,
2012, *Building Resilience: Social Capital in Post-Disaster Recovery*, University of Chicago Press.
- Alesina, A. and La Ferrara, E,
2002, "Who Trusts Others?" *Journal of Public Economics*, 85(2):207-234.
- Allport, G. W,
1954, *The Nature of Prejudice*, Cambridge, Addison Wesley.
- Anderson, C. J. and Paskeviciute, A,
2006, "How Ethnic and Linguistic Heterogeneity Influence the Prospects for Civil Society: A Comparative Study of Citizenship Behavior" *Journal of Politics*, 68(4):783-802.
- Bekkers, R,
2012, "Trust and Volunteering: Selection or Causation?: Evidence from a 4 Year Panel Study" *Political Behavior*, 34(2):225-247.
- Bollen, K. A. and Ting, K. F,
1993, "Confirmatory Tetrad Analysis" *Sociological Methodology*, 23:147-175.
- Coleman, J. S,
1961, *The Adolescent Society: The Social Life of the Teenager and Its Impact on Education*, Free Press.
- Costa, D. L. and Kahn, M. E,
2003, "Civic Engagement and Community Heterogeneity: An Economist's Perspective" *Perspectives on Politics*, 1(01):103-111.
- Couch, L. L. and Jones, W. H,
1997, "Measuring Levels of Trust" *Journal of Research in Personality*, 31:319-336.

- Dasgupta, P.
2000, "Trust as a Commodity" Gambetta, D. ed. *Trust: Making and Breaking Cooperative Relations*, Oxford University Press, 49-72.
- Delhey, J. and Newton, K.
2005, "Predicting Cross-National Levels of Social Trust: Global Pattern or Nordic Exceptionalism?" *European Sociological Review*, 21(4):311-327.
- Delhey, J., Newton, K., and Welzel, C.
2011, "How General Is Trust in "Most People"? Solving the Radius of Trust Problem" *American Sociological Review*, 76(5):786-807.
- Dincer, O. C.
2011, "Ethnic Diversity and Trust" *Contemporary Economic Policy*, 29(2):284-293.
- Dinesen, P. T. and Sønderskov, K. M.
2011 "Ethnic Diversity of the Micro-Context and Generalized Trust: Evidence from Denmark" Unpublished Manuscript (<http://www.ecprnet.eu/MyECPR/proposals/reykjavik/uploads/papers/2167.pdf>).
———, 2012, "Trust in a Time of Increasing Diversity: On the Relationship Between Ethnic Heterogeneity and Social Trust in Denmark from 1979 Until Today" *Scandinavian Political Studies*, 35(4):273-294.
- Finseraas, H. and Jakobsson, N.
2012, "Trust and Ethnic Fractionalization: The Importance of Religion as a Cross-Cutting Dimension" *Kyklos*, 65(3):327-339.
- Fox, J.
2008, *Applied Regression Analysis and Generalized Linear Models 2nd ed*, Sage.
- Glanville, J. L. and Paxton, P.
2007, "How Do We Learn to Trust?: A Confirmatory Tetrad Analysis of the Sources of Generalized Trust" *Social Psychology Quarterly*, 70(3):230-242.
- Grootaert, C. and Van Bastelaer, T.
2002, *Understanding and Measuring Social Capital: A Multidisciplinary Tool for Practitioners (Vol.1)*, World Bank Publications.
- Gundelach, B. and Traunmüller, R.
2014, "Beyond Generalised Trust: Norms of Reciprocity as an Alternative Form of Social Capital in an Assimilationist Integration Regime" *Political Studies*, 62(3):596-617.
- Håkansson, P. and Sjöholm, F.
2007, "Who Do You Trust? Ethnicity and Trust in Bosnia and Herzegovina" *Europe-Asia Studies*, 59(6):961-976.
- Hardin, R.
2002, *Trust and Trustworthiness*, New York: Russell Sage Foundation.
- Harper, R. and Kelly, M.
2003, *Measuring Social Capital in the United Kingdom*, UK: Office for National Statistics.
- 橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年
2010、「大学生サークル集団におけるコミットメント・モデル——準組織集団の観点からの検討——」『実験社会心理学研究』50(1):76-88.
- Hirschman, A. O.
1964, "The Paternity of an Index" *American Economic Review*, 54(5):761-762.
- Hooghe, M.
2007, "Social Capital and Diversity Generalized Trust, Social Cohesion and Regimes of Diversity" *Canadian Journal of Political Science*, 40(03):709-732.
- Hooghe, M., Reeskens, T., Stolle, D., and Trappers, A.
2009, "Ethnic Diversity and Generalized Trust in Europe: A Cross-National Multilevel Study" *Comparative Political Studies*, 42(2):198-223.
- 稲垣佑典
2009、「都市部と村落部における信頼生成過程の検討」『社会心理学研究』25(2):92-102.

岩淵亜希子

2008、「一般的信頼感の規定要因——階層、地域、社会関係——」『2005年SSM調査シリーズ8 階層意識の現在』207-226.
金澤悠介

2008、「社会関係資本と一般的信頼の生成——二つの仮説の経験的検証と新たな仮説の提示——」『社会学研究』84:45-68.
Kawachi, I., Kennedy, B. P., and Glass, R.

1999, "Social Capital and Self-Rated Health: A Contextual Analysis" *American Journal of Public Health*, 89(8):1187-1193.
Kazemipur, A.

2006, "A Canadian Exceptionalism?: Trust and Diversity in Canadian Cities" *Journal of International Migration and Integration*, 7(2):219-240.

Knack, S. and Keefer, P.

1997, "Does Social Capital Have an Economic Pay-Off?: A Cross-Country Investigation" *Quarterly Journal of Economics*, 112:1251-1288.

Leigh, A.

2006, "Trust, Inequality and Ethnic Heterogeneity" *Economic Record*, 82(258):268-280.

Lewis, J. D. and Weigert, A.

1985, "Trust as a Social Reality" *Social Forces*, 63(4):967-985.

Li, Y., Pickles, A., and Savage, M.

2005, "Social Capital and Social Trust in Britain" *European Sociological Review*, 21(2):109-123.

Marschall, M. J. and Stolle, D.

2004, "Race and the City: Neighborhood Context and the Development of Generalized Trust" *Political Behavior*, 26(2):125-153.

McPherson, J. M. and Smith-Lovin, L.

1987, "Homophily in Voluntary Organizations: Status Distance and the Composition of Face-to-Face Groups" *American Sociological Review*, 52(3):370-379.

McPherson, J. M., Smith-Lovin, L., and Cook, J. M.

2001, "Birds of a Feather: Homophily in Social Networks" *Annual Review of Sociology*, 27:415-44.

Morales, L. and Echazarra, A.

2013, "Will We All Hunker Down?: The Impact of Immigration and Diversity on Local Communities in Spain" *Journal of Elections, Public Opinion & Parties*, 23(3):343-366.

内閣府

2003、「『ソーシャル・キャピタル——豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて——』。

Nannestad, P.

2008, "What Have We Learned About Generalized Trust, If Anything?" *Annual Review of Political Science*, 11:413-436.

Paxton, P.

2007, "Association Memberships and Generalized Trust: A Multilevel Model Across 31 Countries" *Social Forces*, 86(1):47-76.

Pettigrew, T. F.

1998, "Intergroup Contact Theory" *Annual Review of Psychology*, 49(1):65-85.

———, 2009, "Secondary Transfer Effect of Contact: Do Intergroup Contact Effects Spread to Noncontacted Outgroups?" *Social Psychology*, 40(2):55-65.

Pettigrew, T. F., Tropp, L. R., Wagner, U., and Christ, O.

2011, "Recent Advances in Intergroup Contact Theory" *International Journal of Intercultural Relations*, 35(3):271-280.

Portes, A. and Vickstrom, E.

2011, "Diversity, Social Capital, and Cohesion" *Annual Review of Sociology*, 37:461-79.

Putnam, R. D.

1993, *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press.

———, 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon and Schuster.

———, 2007, "E Pluribus Unum: Diversity and Community in the Twenty-First Century. The 2006 Johan Skytte Prize Lecture" *Scandinavian Political Studies*, 30(2):137-174.

- Rothwell, J. T.
2012, "The Effects of Racial Segregation on Trust and Volunteering in US Cities" *Urban Studies*, 49(10):2109-2136.
- 齋藤崇子・中村知靖・遠藤利彦・横山まどか
2001, 「性格特性用語を用いたBig Five尺度の標準化」『九州大学心理学研究』2:135-144.
- Savelkoul, M., Gesthuizen, M., and Scheepers, P.
2011, "Explaining Relationships Between Ethnic Diversity and Informal Social Capital Across European Countries and Regions: Tests of Constrict, Conflict and Contact Theory" *Social Science Research*, 40(4):1091-1107.
- 日本私立大学連盟
2011, 『私立大学学生生活白書2011』。
———、2015, 『私立大学学生生活白書2015』。
- Stolle, D. and Hooghe, M.
2004, "The Roots of Social Capital: Attitudinal and Network Mechanisms in the Relation Between Youth and Adult Indicators of Social Capital" *Acta Politica*, 39(4):422-441.
- Stolle, D., Petermann, S., Schmid, K., and Heywood, J.
2013, "Immigration-Related Diversity and Trust in German Cities: The Role of Intergroup Contact" *Journal of Elections, Public Opinion & Parties*, 23(3):279-298.
- Tolsma, J., Van der Meer, T., and Gesthuizen, M.
2009, "The Impact of Neighbourhood and Municipality Characteristics on Social Cohesion in the Netherlands" *Acta Politica*, 44(3):286-313.
- Uslaner, E. M.
2002, *The Moral Foundations of Trust*, Cambridge University Press.
———, 2011, "Contact, Diversity, and Segregation" *Stockholm University Linnaeus Center for Integration Studies-SULCIS*, No. 2011(5):1-89.
- Van der Meer, T. W. G., and Tolsma, J.
2014, "Ethnic Diversity and Its Effects on Social Cohesion" *Annual Review of Sociology*, 40:459-478.
- 和田さゆり
1996, 「性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成」『心理学研究』67(1):61-67.
- Wright, S. C., Aron, A., McLaughlin-Volpe, T., and Ropp, S. A.
1997, "The Extended Contact Effect: Knowledge of Cross-Group Friendships and Prejudice" *Journal of Personality and Social Psychology*, 73(1):73-90.
- 山岸俊男
1998, 『信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム——』東京大学出版会。
- Yosano, A. and N. Hayashi.
2005, "Social Stratification, Intermediary Groups and Creation of Trustfulness" *Sociological Theory and Methods*, 20(1):27-44.
- Zak, P. J. and Knack, S.
2001, "Trust and Growth" *The Economic Journal*, 111(470):295-321.
- Zerfu, D., Zikhali, P., and Kabenga, I.
2009, "Does Ethnicity Matter for Trust?: Evidence from Africa" *Journal of African Economies*, 18(1):153-175.